

八ツ場ダムの 威力

国土学アナリスト
大石久和
Hisakazu Ohishi

ついても、山の緑化で緑のダムを造ればよいなどと、何の検証もしないままのアンチダム議論が繰り返しなされてきた。

日本学術会議は、森林の治水効果は降り出した最初の一〇〇ミ程度の雨を吸収するだけで、それ以降の降水には効果がなるとの結論を出している。時間雨量一〇〇ミとか総雨量一、〇〇〇ミといった豪雨が、各地で災害を起こしているものであって、一〇〇ミが総雨量ならまず何の問題も生じない。初期の一〇〇ミしか吸収できない森はダムの代替になり得ないのである。水が余っているかどうかは、何年確率の渇水に耐えるだけの水があるかどうかで判断しなければならぬ。平均的な降雨に対して需要が満たせるのは当然なのだ。何年に一度の渇水に備えてどれだけの貯水容量を確保しておくかが問題なのだ。

今年、春先が暖かであったために融雪が例年より早く、四月中旬には、藤原ダム、矢木沢ダム、奈良俣ダムといった通称・奥利根五ダムが満水となっていた。さらに、四月から五月にかけて小雨であったうえに、融雪も終わりつつあったから、利根川流域の田植えなどの水需要に対してダムからの補給が必要となった。その後も、七月上旬にかけて小雨が続いたた

一〇〇九年九月、今から思い起こせば悪夢のようだったといわざるを得ない政権交代が起こった。政治主導という言葉が広く喧伝され、世間は高揚し興奮していた。そんななかで九月十六日、前原国土交通大臣は、就任したその日のぶら下がり取材の場で、「八ツ場ダムは、マニフェストで中止としていたから事業を中止する」と明言した。

ダムの受益者は下流に住む人々であって、用地を提供する地元の地権者ではない。したがって、ほとんどのダム建設では建設の是非や用地取得を巡って紛議が生ずる。この大臣の判断に対して、ダム建設という大きな政策に長年反対しながらも、最近になってやっと苦渋の決断により本体工事と代替地転居を受け入れていた地元住民は大きく反発した。

現場視察や関係行政機関との意見交換や、地元住民との接触など一切経ないまま、ぶら下がりに取材という、いわば立ち話の状況で、何時間か前にその職に就いたばかりの大臣が、慎重な判断を要する大きな政治判断を下したのである。地元住民の五〇年にも及ぶ、一生をかけた闘争の結果の建設受忍という地域の「血と涙」の総括を、何の手続きも踏まないまま、無下にも無視したのである。

め、農業用水の需要期ということもあって、ダムからの補給が続く、その結果、利根川上流のダム群の貯水容量が大幅に減少し、七月二十三日には一〇%の取水制限が実施されることとなった。

そこで、国土政策研究所では、八ツ場ダムが完成していたとすれば今年の取水制限はどういうことになっていただろうと研究してみたのである。

八ツ場ダムには融雪水などが貯留され、四月中旬には他の奥利根ダムと同様に満水になっていたと考えられる。そうすると、四月中旬以降に行われたダムからの一億五、〇〇〇万立方分の補給水のうち、八ツ場ダムの満水位から「夏期制限水位」にまで低下させるために放流することとなっている六、五〇〇万立方分が補給量として活用できたはずである。そうすると、その差分は、他のダムに貯留されたままとなっていることになる。

八ツ場ダムのない今年には、八つの利根川上流のダム群の貯水容量が一億七、三〇〇万立方分となったことから取水制限したのだが、八ツ場ダムには六、五〇〇万立方分放流した後にも二、五〇〇万立方分の貯水量が残っているから、もしこのダムがあれば、総貯水容量は二億

このマニフェストは、どれだけの科学的・技術的な検証を経て記載されたものだったのだろうか。「書いたからには必ずやる」というほどの根拠があったのだろうか。

その後、八ツ場ダムは、二〇一一年十一月の関東地方整備局による検討報告書で「洪水調節、新規利水について総合評価を行った結果、八ツ場ダム案が最も有利である」とされ、当時の前田国土交通大臣は、これまでの混乱を謝罪したうえで、「工事の再開」を表明した。

しかし、この二年間の政治的翻弄は高価なものだった。中断による増額は、二年間の中止と約三年の工期延長などにより、現場の維持に要した費用などを合わせると約五五億円にもなるとの試算がある。

また、総工費約四、六〇〇億円のうち、すでに投資していた約三、三〇〇億円はこの金のない時代だというのに、何の役にも立たないまま凍結されたままという無駄もあった。仕分けなどという政治ショーがもてはやされたが、この無駄の指摘は誰からもなされていない。

「わが国では少水化技術などが進んだ結果、もう水は余っている」から、新たなダムなど不要なのだという、アンチダム運動とでもいって下地が八ツ場議論の背景にある。治水効果に

六、三〇〇万立方分であったと推定され、「取水制限を実施する状況にはならない」と考えられるのである。

ダム群の貯水容量は夏期には減少を続け、九月の台風期に再び増加を始める。過去のダム群の総貯水量の減少傾向から推計すると、七月二十三日の取水制限は、八月中旬にまで延伸することができた可能性が高いのである。

夏期は農業用水の需要期であるが、都市生活民にとっても水の最大の需要期である。今年の春からの気温や降雨状況から来た話ではあるが、七月から八月に取水制限を伸ばすことができれば、産業への影響は小さくなり、生活は快適性の低下をまぬがれるに違いない。ダムからの補給が必要な時期は、融雪が早い場合には四月から九月までの長期にわたる。すでに示したように、四月から六月にかけての補給に八ツ場ダムは、効果的かつ有効に機能することが明らかなのである。

この国から、事実や数字に裏付けられた議論が消え、「ダムは無駄」などというレッテル貼りや思考停止に誘導する議論ばかりが増えている。八ツ場ダムの利水面だけの効用でも以上の通りである。治水効果も考えると一日でも早い完成が望まれるのである。